

# 掲示版

# こ〜じのう



発行所 (社福)千葉県身体障害者福祉事業団  
 千葉県千葉リハビリテーションセンター  
 発行責任者 高次脳機能障害  
 相談支援体制連携調整委員会  
 委員長 吉永 勝訓  
 〒266-0005 千葉市緑区誉田町 1-45-2  
 TEL 043-291-1831 (代)内178  
 発行日 2008年2月15日

## も く じ

	<b>掲示版 第4号</b>	
巻頭	高次脳機能障害者への支援について	1
報告	全国の動き	2~3
報告	損保講習会	4
報告	プロジェクト・班だより	5~6
	こんにちは!	7
	千葉懇話会	8
	参加報告	9
	まめ知識コーナー	10
	インフォメーション	10
	編集後記	10

## 高次脳機能障害者への支援について

### 高次脳機能障害相談支援体制連携調整委員会

委員 岡 信 男

医療法人社団誠馨会自動車事故対策機構千葉療護センター センター長

また、立場上、自動車賠償責任保険の診断書を見る機会が多くあります。このような診断書には、受傷した後、幸いに手足の障害は軽く日常動作の不自由はないが、短気で怒りっぽくなった、物忘れが強くなったなどの高次脳機能障害に該当する記載が多く見られます。

若い人の場合にはこのような状態になったために、受傷前の仕事に復帰できない場合も多く、また、高齢者の場合には、日常生活のQOLが大きく低下して、家族の見守りが必要になったケースが多く見られます。

今の社会は高次脳機能障害のある人に十分なサポートをしているとは言えない状態だと思えます。高次脳機能障害の治療を普及させることはもちろん必要ですが、視覚障害者のために道路の点字ブロックや音声案内付きの信号が整備され、足の弱い人のために駅にエレベーターやエスカレーターがあるのが当たり前になったように、高次脳機能障害者や軽度の認知症の人が安心して生活できるようなインフラストラクチャーを整備していくことが今後ますます重要になってくると考えています。



私は自動車事故対策機構千葉療護センター という病院で、自動車事故で、寝たきりに近い重症の後遺症をもった患者さんの治療に当たっています。

# 報告

## 平成19年度 高次脳機能障害支援普及事業 第2回支援拠点機関等全国連絡協議会報告

日時：平成20年2月29日

場所：三田共用会議所

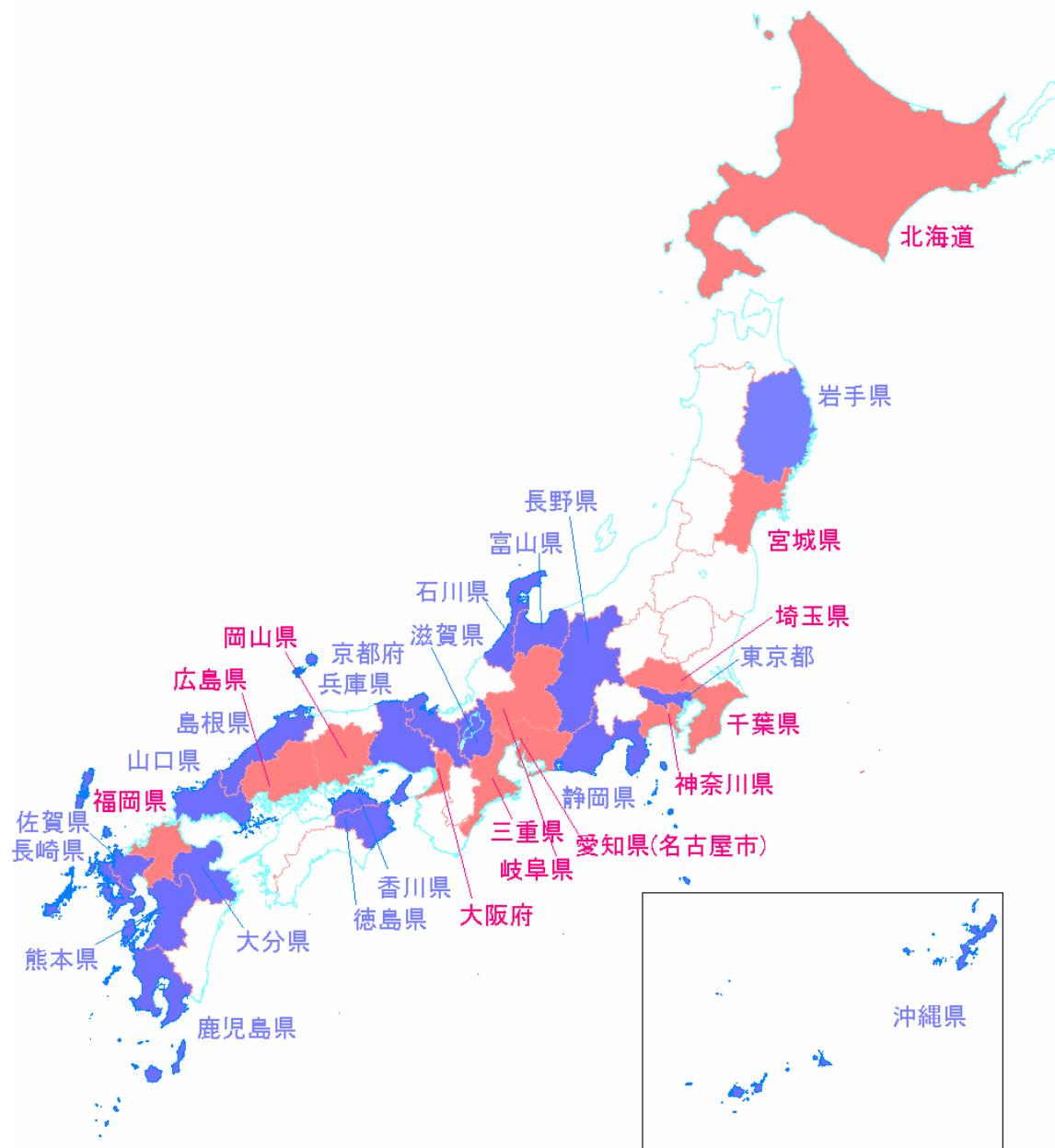
千葉県より出席者：千葉県 蓬田 支援拠点機関 江口地域支援室長

厚生科学研究分担研究者 太田支援コーディネーター

厚生科学研究分担研究者からの報告

国リハ 各ブロック責任県支援拠点機関 分担研究自治体

内容：1)平成20年2月29日現在 30自治体が高次脳機能障害支援普及事業実施に伴う支援拠点機関を指定しました(岩手県は事前資料に載っていなかったが、当日東北ブロックより報告あり。)



2)北海道、東北、関東甲信越、東京都、東海、北陸、近畿、四国、中国、九州沖縄の各ブロックから報告されたあと、千葉、岐阜、三重、岡山から報告しました。千葉県からも報告しました。ここでは、以下の表に示すとおり、12月末日現在の実績を実人数で報告致しました。

支援拠点機関事業実績

実績分類 実施月	成人		電話 相談 のみ	小児	更生園	支援者 合計	市町村等 訪問機関数	外部者対象研修会	
	入院	外来						開催数	参加人数
H19.4月	65	68	20	36	39	228		1	12
H19.5月	71	79	18	33	48	249		2	111
H19.6月	73	77	30	27	44	251	6	3	176
H19.7月	75	86	14	32	54	261	6	2	130
H19.8月	57	83	13	36	50	239	5		
H19.9月	55	83	13	33	50	234		2	133
H19.10月	70	81	21	30	46	248	5	3	391
H19.11月	70	78	15	22	52	237	8	2	129
H19.12月	83	78	10	23	46	240		4	292
合計	-	-	-	-	-	-	30	19	1373

実績に示す人数は実人数であり、単純に合計できないため、(-)で示す  
 電話相談のみ：機関の紹介や制度に関する情報提供・相談のみで、外来等につないでいないもの  
 更生園：肢体不自由者更生施設で、入園者および相談窓口での対応者  
 市町村等訪問機関：市町村担当窓口および保健センター、中核地域生活支援センターなどを含む  
 外部者対象研修会：主催が千葉県支援拠点機関である千葉リハビリテーションセンターでなくても、講師派遣等で協力した場合も含む

その他、各プロジェクトの実績を記述的に報告しましたが、今後は、記述的な報告から、数値に換算可能な形で報告することが、厚労省からは一層強く求められそうです。

3)平成20年度運営方針について

報告：厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 企画課 課長補佐 宮本 哲也氏  
 高次脳機能障害支援普及事業は、自立支援法に基づく地域生活支援事業の一部として平成18年度から開始されました。平成19年12月25日には、【新たな「重点施策実施5か年計画」】の施策に指定されました。

数値目標としては、平成24年度で、全都道府県に高次脳機能障害支援拠点機関を設置することが掲げられています。

(支援コーディネーター太田)



## 高次脳機能障害リハビリテーション講習会

H20年2月2日に千葉市美浜文化ホールにおいて、「支援ネットワーク構築の現状と課題」生活を支える身近な行政・福祉・医療の連携」をテーマとした講演とシンポジウムを（社）日本損害保険協会の助成事業として行いました。

第一部の講演は、静岡英和学院大学人間社会学部地域福祉学科学准教授白山靖彦准先生に「高次脳機能障害者を支援する人の果たすべき役割」とした演題の講演でした。白山先生の講演レジメから引用掲載させていただきます。

『高次脳機能障害に対する支援は、2001年度からの高次脳機能障害支援モデル事業、2006年度からの高次脳機能障害支援普及事業などによって、発展著しい。しかし、こうした支援体制が整備されていく中で、専門家の育成は明らかに追いついていない状況といえる。演者は、高次脳機能障害支援モデル事業に早期から関わり、いわゆる「三重モデル」の構築を担ってきた。また、研究者として、神経心理学的要因、リハビリテーション効果などといったエビデンスに基づいた臨床研究にも携わり、高次脳機能障害者に対する支援の困難さを数多く体感した。

現在、支援普及事業によって、全国30余りの都道府県において支援機関が指定され、そこに支援コーディネーターが単数または複数設置されることになった。千葉県においても、早期から高次脳機能障害の問題に着手し、千葉リハビリテーションセンターを中心に、地域支援ネットワークが構築されている。演者は、高次脳機能障害者の地域支援ネットワークを以下のように定義した（高次脳機能障害ハンドブック、医学書院、2006）

「高次脳機能障害者の地域・社会生活上の問題を多様なニーズと捉え、支援機関および関係機関などのフォーマルな対象、そして当事者・家族などのインフォーマルな対象までも連携先とし、医学・社会・職業・認知リハなどを包摂したリハシステムと連動する支援体制のあり方を『支援ネットワーク』という。」

では、支援ネットワークはどのようにして創られるのか、そして、それを想像する人に求められるものとはなにか、という命題に対して本日講演したい。

皆様には、次の3つの質問について答えたいと思います。

1. 支援ネットワークとは、どこにあるのか。
  2. あなたの役割とはなにか。
  3. 役割の遂行には、何がもっとも必要なのか。
- 以上レジメより —

白山先生の講演では、支援ネットワークを築いていくためのヒントがたくさんちりばめられていました。それぞれ自分のできる役割を考へることを提案され、参加された方々がそれぞれの立場や視点から考えられたのではないでしょう。このそれぞれ考えたことをどのように行動に移していくか、そしてそれらをつなぐ支援ネットワークができれば素晴らしいと感じました。

第二部はシンポジウムでは、千葉リハビリテーションセンターの大賀脳外科部長のコーディネーターによる進行のもと、千葉県健康福祉部の安藤障害福祉課長、朝日神経内科リハビリテーション病院の旭院長、松戸市障害福祉課の長島副保健師長、NPO法人日本脳外傷友会の東川理事長、千葉リハビリテーションセンターの太田地域連携部長（高次脳機能障害支援普及事業の支援コーディネーター）がシンポジストとして意見を述べてもらいました。

高次脳機能障害支援普及事業をどのように進めていこうとしているのか、県のスタンスを知り、地域医療機関が高次脳機能障害に関わっている状況や今後の連携についての意見。相談窓口となる市の福祉担当者からの発言では、家族との集まりに市の担当者も参加されており、家族たちの困っていることや要望などを含めた意見がありました。脳外傷友の会の東川氏からは、これまで積極的に活動されてきたことや各地の活動状況などの報告をいただきながら、千葉でもさらに高次脳機能障害の支援の輪が広がることへの応援を頂き、太田支援コーディネーターから千葉の高次脳支援普及事業の実績をもとに報告がありました。

時間の都合から、各シンポジストの意見を受けて会場と一緒にディスカッションすることが不十分となつてしまいました。これらの意見を聞き、参加された方々が現状の高次脳支援事業の状況を知る機会となり、これから何をすべきかを考える機会になったのではないのでしょうか。

家族会も千葉県内で5つ立ち上がっている中で、それぞれの活動をしようとしたときに地域が複数の市町村にまたがった組織となつてると各市町村が柔軟に対応してもらうことができない現状の話もありました。生活を支える身近な行政・福祉・医療の連携への期待とともに白山先生の講演でも話されたように、自分ができることをまずは始めることから希望するよりよい支援ネットワークができていくのではないのでしょうか。

参加状況を報告しますとスタッフ・講師を除いて191名の参加を頂きました。医療関係者が約35%、福祉関係者が約25%、行政が約10%、当事者の方、家族が約20%でした。アンケートの意見も多くの記載をいただき、こうした講習会への期待の高さを感じました。引き続き高次脳機能障害普及支援のひとつとしてこのような講習、研修会も計画していきますので、皆様の意見や参加などご協力をよろしく願います。

（地域連携部 森戸）

# 3 報告

## 成人リハビリプログラムミングワーキンググループ1

今回は当ワーキンググループで取り組んでいるなかから「リハビリプログラムの整理とシステム構築についての進捗状況」と「簡便でかつ感度の高い神経心理バッテリーの組み立てと他医療機関等への提供」について報告いたします。

この課題は、入院による医学的リハから外来での集団リハまでのプログラムの体系化・整理と、それにもとづくリハプロトコル（複数の者が対象となる事項を確実に実行するための手順等について定めたものを作成する）の確立を目的にすすめています。これにより、

リハに関わる担当者間での分業と共有体制および分業と共有内容の明確化

他施設でも無理なくプログラムを導入し、行うことができるようになりハビリマニユアルの作成といったことに結び付けていくことを目指しています。

また、簡便な神経心理検査バッテリーを組み立てて他の医療機関や施設に提供できるようにしていく作業にも取り組んでおります。これは、検査に多くの時間やスタッフを当てることのできない医療機関でも取り組みやすいように簡便ながらもかなりの確かな評価が行えるようなものを構築することを目的としています。

このほかの取り組みとしては、成人の高次脳機能障害を持つ方の処遇検討や職員学習会を開催するなども行ってきました。

ワーキンググループの成果報告をする段階まで至っておりますが、以上のようなことに取り組んでいるワーキンググループです。今後も当ワーキングの動きを報告していきますのでよろしくお願ひします。

（成人リハ 森戸）

## プロジェクト・班だより

このコーナーでは  
千葉県高次脳機能障害支援センターの活動を時報告していきます

### 小児高次脳プログラミングプロジェクト班2

当プロジェクト班の最近の活動は、高次脳機能障害方ンファレンスの開催、小児高次脳リハビリテーションプログラムの整理、社会復帰支援である学校訪問による学校教職員との連携、社会復帰支援の効果判定のための6ヶ月後家族アンケートの実施などを継続して行っています。これらの活動の中で、子どもたちやご家族の変化に喜びを感じつつ、一方では、子どもたちの新たな問題やご家族の困り感に直面し、どのような支援が出来るのか・・・メンバーで試行錯誤している次第です。

先日は、学校訪問を実施するために県内の特別支援学校に行き参りました。この支援の対象は主に当センターに入園されていたお子さんです。当センターを退園されてご家庭に戻られると、社会生活の場である地域の学校での生活が始まります。退園時にご家族が希望された場合に、リハビリテーションや病棟の担当スタッフが数人で学校に訪問します。訪問して何をするかというと、高次脳機能障害とはどういうことかについての説明をしています。またその後、学校での様子を伺いながら、具体的にそのお子さんの対応方法や学習方法などについて、クラス担任や子どもたちに関わる先生方と話し合いをすることも多いです。最後には先生方にアンケートをお願いし、また、ご家族には訪問から6ヶ月後にアンケートをお願ひし、私たちの支援の方法や内容について検証しています。今回の訪問後には、学校の先生から「高次脳機能障害について明確にわかり、対応方法について具体的に話し合いができ、とてもよかったです。」という感想をいただきました。

何らかの原因により高次脳機能障害となった子どもたちは、発達の途上にあり、障害された脳で新たに多くのことを学習し、長く学校生活を送り、社会の一員として自立を目指していきます。私たちはその過程を支援し続けていきたいと思っています。

（小児高次脳 廣瀬）

市町村相談支援班3

本年度は、二回目ということもあって市町村の障害担当窓口だけでなく、高齢者担当窓口、特に千葉県内は、地域包括支援センター」を直営で設置している率が高いこともあってそうしたところの専門職の皆様にもご協力を得たいということで訪問してきました。また、実際に高次脳機能障害の方の地域での日中活動を支える機関として作業所や施設の利用ということも。

本年度これまで訪問した市町村は、千葉市、旭市、香取市、東庄町、銚子市、成田市、酒々井町、匝瑳市、多古町、芝山町、神崎町、木更津市、君津市の8市5町、計46か所です。

障害担当窓口では、「高次脳機能障害」という言葉を知らないということはあるが、無くなつてしまいましたが、引き続き幅広く理解を得られるように努めて参ります。また、モデル事業時代にかかわっていた方が市町村の方へ御相談に行かれていたといったケースもできていますので、支援機関、支援者間の連携や情報の共有ということも一層重要になってきていると感じています。

(市町村 江口)



旭市の障害・高齢者担当者への説明

就労支援移行プロジェクト4

障害者職業総合センターにて作成された、就労移行支援のための「チェックリスト」をご存知ですか？

「日常生活（11項目）」「働く場での対人関係（8項目）」「働く場での行動・態度（15項目）」の三分野で構成された「必須チェック項目」とその他の「参考チェック項目（9項目）」とで構成されています。それぞれ5段階評価からなり、1〜3は支援を必要とする段階となります。「出来る」「出来ない」の選別が目的ではなく、「個別支援計画」を作成し支援計画を進めるためと、関係各機関で共通して利用できるツールとして一昨年作成されました。

この「チェックリスト」は高次脳機能障害者だけを対象としたリストではありません。しかし、これを現在実施している「職業前リハビリテーションプログラム」の中の3ヶ月評価で試用してみると、さすがに当事者の方々の把握し評価の整理が出来て課題を浮き上がらせることが出来ます。もちろん、このリストだけではなく、訓練場面や生活場面の中で高次脳機能障害の特性を把握して対応する方法を探る評価&支援・訓練も行なっています。

就労移行支援プロジェクトの中では、このように実際の活動を通して、就労移行のための支援に役立つ評価内容の試行・検討も行なっています。

(就労支援 小倉)



3/1!  
上映!

東京慈恵大 橋本圭司先生が医療監修をした映画「ガチ ボーイ」が3月1日に公開されます。高次脳機能障害を抱えた若者が主人公の青春映画です。

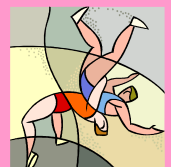
映画「ガチ ボーイ」オフィシャルサイトより・・・

明日の僕へ

ボクの記憶は一日しか持たない・・・だから毎日が一生懸命  
ボクは幸せだ・・・アタマはどんなに忘れても、カラダは昨日のボクを忘れない  
事故で頭を打って以来寝るとその日にあったことをすべて忘れてしまう「高次脳機能障害」  
を負ってしまった青年がプロレスと出会い、頭で覚えてなくても体が覚えていることで生きる実感を取り戻していく青春ストーリー。親子の絆、仲間との友情、恋愛・・・  
笑って泣いて元気になれる。青春映画ってこんなにもすばらしい!

ガチボーイ

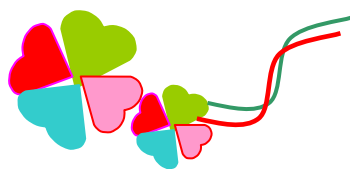
主演 佐藤 隆太  
サエゴ  
向井 理  
仲 里依沙  
宮川 大輔  
泉谷 しげる





【第6回】

# 高次脳機能障害交流会



### 問い合わせ

千葉リハビリテーションセンター  
地域支援室  
043-291-1831  
(内線182)

高次脳機能障害の当事者と家族を中心とした交流会です。今回で6回目になります。

日時 平成20年3月22日(土)

13:00~16:10

場所 千葉リハビリテーションセンター大ホール  
(千葉市緑区誉田町1-45-2)

参加費 無料

内容 第一部講演 コロポックル中野匡子氏  
家族会が支える当事者の地域生活についてお話をします。  
第二部講演 荏原実千代氏 千葉リハ小児神経科  
小児の高次脳機能障害についてお話しします。  
講演終了後、小児、更生園、成人各交流会をもちます。

## こんにちは!



外部団体・市町村で取り組んでいる様子を紹介していきます

### ちは高次脳機能障害者と家族の会

ちは高次脳機能障害者と家族の会は、2000年(平成12年)6月、故鈴木照雄代表を中心に家族7人・医療関係者5人が定期的に集まることから始まり、その後約1年を経過した2001年(平成13年)4月28日の第5回定例会を設立総会とし、家族会組織として発足、活動を開始しました。

2001年は国の「高次脳機能障害モデル事業」が開始された年で、千葉県がモデル事業に参加したきっかけも、当会から船橋市選出の県会議員(公明党)に働きかけて、県議会で質問が行われたことでした。

当初の参加は10箇所の都道府県で、千葉県では千葉リハビリテーションセンターが拠点病院となったことから、引き続き現在の支援拠点機関へと継続されています。

当会の活動は、会員の困っていることや悩みを県などの行政や千葉リハなど医療分野へ訴求・要望をすること、「家族への情報提供が当事者の利益につながる」との思いから、定例会に併せた講演会などの勉強会・研修会・相談会の開催、「情報は全会員に同様に伝えたいこと」から定例会の模様を出来るだけ詳細に周知する「活動ニュース」発行、を中心としています。

定例会の会場は、船橋市を中心とした会員が多くを数えるため、船橋市中央公民館の利用を中心としています。

今後の活動も、年々変化する会員の要望を行政・医療・福祉の各分野に、広く知ってもらうこと、会員相互の和・輪を広げるための定例会開催・活動ニュース発行、などに加えて、県内5つの家族会との連絡会を通して、協調を図りながら地道に活動を続けたいと思います。皆様のご支援をお願い致します。

世話人 角田義規

### 会への入会

#### 入会金

当事者・家族会員 年三千元、賛助会員 年二千元

申込・連絡先 〒262-0005 千葉県船橋市元町1-9-9

TEL 066(4246) 6001-5

E-mail [tuno@mx6.ttcn.ne.jp](mailto:tuno@mx6.ttcn.ne.jp)



## 千葉懇話会報告

前号では、第3回千葉リハビリテーション懇話会(H19.11.6)の報告としてアンケート結果を少し報告させていただきました。今回改めて内容の報告をさせていただきます。

今回は、事例検討をディスカッション形式で行いました。2つの事例をスライド報告し、その後、報告事例に基づき医療リハビリに関することや、社会リハビリ、社会資源や福祉サービスに関することなどの多岐にわたる視点から意見交換していただきました。

**事例1**発症時41歳 女性 疾患 くも膜下出血 症状 右不全片麻痺(上肢) 失語症 注意障害 記憶障害 遂行記憶障害 職業 休職 家族 母、子供2人 医療介入期間 17ヵ月(入院2ヶ月、外来15ヵ月) その後復職に至ったケース

**事例2**発症時43歳 男性 疾患 脳出血 症状 右不全片麻痺(軽度) 注意障害 易疲労性 記憶障害 左半側無視 左側同名半盲 職業 会社員(高次脳支援介入時は退職後) 家族 母 医療介入期間 4年弱(現在もフォロー有) 社会的リハとして、身体障害者更生施設入所利用後、介護保険施設通所サービス利用をしながら在宅

これらの事例について、神経心理学の検査所見 各時期の介入状況などの報告をし、その後主に医療リハビリについてディスカッションするグループと社会リハビリについてディスカッションするグループに分かれておこなわれました。

参加者は、医療機関スタッフや福祉施設、相談機関、就労支援機関、ご家族などのいろいろな立場の方たちで活発な意見交換もされておりました。医療リハのアプローチに関することや、社会参加に向けての支援の内容やタイミング、社会資源などについて討議されました。

会場がひとつで2つのグループの声が交錯してしまったり、ディスカッションのテーマがしぼり切れなかったり、事前に検討事例の情報を伝えられなかったりなどの課題もありましたが、講義形式よりディスカッション形式の方がよいとの意見が多くありました。

支援に携わるそれぞれの立場からの参加があり、急性期に関わる支援者は、その後の経過や支援体制がどうなっているのかを知る機会につながり、医療リハビリに関わる支援者は、病院内とは違った視点の話を聞く機会となり、福祉、就労に関わる支援者は医療でどのように支援されてきているのかを知る機会となりました。

今もそれぞれの場面において課題となることなどいろいろと出てきていることと思います。今、ディスカッションしたいことはありますか？

2グループに分かれてディスカッション!



それはどんなことでしょうか？ちょっと考えてみてください。支援のプランがなかなか立てられない。どのような支援が必要なのかうまく説明できない、理解してもらえない。リハビリの効果、支援のタイミングとそれぞれにさまざまな悩みを持っているのではないのでしょうか。私もよりよい支援ができずに困っている一人ですが、皆さんからも多くの意見をだしあえる場として今後も懇話会を続けていきたいと思えます。

ちよつと余談となりますが、ディスカッション形式でお互いの顔が見えたこともあってか終了後、あちこちで会話をしている姿が多くみられました。やはり、このように支援者たちの顔がお互いに見えることにより継続した支援ができていくのだと思います。皆さん懇話会の質を高めようという呼びかけをしておきながらこう書くのも変ですが、こういった交流こそ大切なことと感じました。本人や家族にも支援する人たちの顔が見えることはとても大切なことです。家族会や交流の場に支援者の方々はぜひ顔を出してみてください。

来年度、第4回の懇話会の開催を予定しています。日時等未定ですが、ぜひ参加くださいますようお願いいたします。開催の案内は、この紙面でも報告します。(千葉リハ 森戸)



所属機関別	参加人数
病院	22
施設	2
就労支援	5
行政	3
家族会	1
その他	9
合計 (スタッフ除)	42



## 高次脳機能障害者支援のためのワークショップ

### 第4回 社会行動障害へのアプローチに参加して

(日時：平成20年3月1日(土)、13：30～16：30 会場：  
 TKP 東京駅八重洲ビジネスセンター 第2ぬ利彦ビル  
 カンファレンスルーム8A)

国立リハビリテーションセンター主催のワークショップに参加し、高次脳機能障害への対応について学習してきました。前日に全国の支援拠点機関が集まる会議が開かれたこともあり、各地からの参加がみられたようでした。この日の説明によると、支援拠点機関は全国で30自治体になっていると、モデル事業後、徐々にですが、広がっている状況がみられています。

さて、社会的行動障害について、「慶應義塾大学精神神経科 専任講師の村松太郎先生」による講演がありました。社会的行動障害という言葉でくくって対応を考えても、対応方法は見つからないという話がありました。つい、言葉をきいてその障害を分かっているつもりになってしまいがちですが、よく考えてみるとどんな社会的行動障害があるのか把握せずに支援に関わろうとしていることが多いことに気づかされました。また、モラルジレンマの話題なども盛り込まれた講演で、問題行動としてとらえる視点のあやふやさなども認識しました。

社会的認知ということ、表情認知や視線認知についての話もあり、表情認知に障害があるとトラブルが多くなりやすいとの話がありました。メールのトラブルが多いのも顔が見えないやり取りが一因と考えられるようです。

昔から言われることですが、「目を見よ」「顔を見よ」などの指示。これらにより行動改善が見られるのか？実際にやってみると表情認知は改善したが、指示の入っている時だけ有効だったという結果があるとのこと。この方法だけで社会的行動障害へ対応できるということではないが、例えばこのようなことに視点を置いて関わってみることが社会的行動障害への対応のヒントになるのではないかとメッセージでした。

後半は「クラブハウス すてつぷな」と「福岡市立心身障害福祉センター」で対応された事例紹介でした。

「クラブハウス すてつぷな」からは所長の野々垣氏が一つの社会行動障害をもつケースに対応したケースの発表でした。通う場での細やかな観察や評価、そして人脈や社会資源など活用しながら長期にわたって本人の変化が見られた事例でした。もちろん、順調に回復をたどったケースではなく、トラブルも多く発生し、本人の障害を理解した対応で注意の切替などを行いつつながら支援された事例でした。

「福岡市立心身障害者福祉センター」からは高次脳機能障害相談支援コーディネーターの和田氏から3つの事例について報告があり、成功した事例、上手く対応できなかった事例の報告をしていただきました。成功事例も参考になります。上手くいかなかった事例もとても参考となりました。講演、事例報告ともに高次脳機能障害は、理由なしに社会的行動障害を起しているのではなく、行動に移る何らかのきっかけ・本人にとっての理由があること、によって、行動のスイッチが入ることにつながる。それによつていづくか、気づくの時間をたくさん要すかもしれないが、周りの対応や環境を整えることにより、社会的行動障害が落ち着いてくることをあらためて認識し、今後の支援に生かしていけるように取組みたいと思います。

(地域連携部 森戸)



こちらでは、障害に焦点をあてた中での生活で使える訓練をまめ知識として掲載していきます

『出来事ノート』  
…日々のエピソードを残していきましょう…

日々の生活場面で起きるさまざまな出来事、この中には高次脳機能障害の影響によって生じる出来事もあることでしょう。このような「出来事による大変さを理解してほしい」「本人の症状を正しく理解し対応してもらいたい」と思うけれど、どうしたら理解してもらえるのか、と考えることも少なくないのではないのでしょうか。高次脳機能障害による出来事は一定して起こるわけではなく、そのときの環境や本人の状態などによっても異なるため、伝えにくいし伝わりにくいものです。そして、大変な思いをしたり工夫したりして対応してきたことも、次に違う出来事が起きたり、時がたつにつれてその時の大変さがうすれてしまったりもするものです。こうしたエピソードをきちんと整理しておくために、「出来事ノート」を作ってみてはいかがでしょうか？記録を続けるのは大変な作業ですが、本人の変化や行動のきっかけとなることに気づくことにもなりますし、家族の工夫などの記録にもなるでしょう。また、障害年金の手続きなど、書類で判断されるものに対し、生活状況を具体的に伝えることにも有効です。ぜひ、エピソードを残していつてみてはいかがでしょうか。

ソーシャルワーカー 森戸 崇行

## インフォメーション・おしらせ

# information

### ちば高次脳機能障害者と家族の会 3月定例会

日時 2008年3月15日(土) 13:00-16:00  
会場 船橋中央公民館 第4集会室  
船橋市本町2-2-5 047-434-5551  
内容 テーマ「高次脳機能障害の対応法」～高次脳機能障害がわかる本」橋本圭司先生 著～東京慈恵大 橋本先生の著書の内容紹介など角田世話人が説明します。  
問い合わせ先 世話人 角田義規 090-4249-3815  
ちば高次脳機能障害者と家族の会

### 「脳損傷の子どもを持つ家族の会」 ハイリハキッズ 3月例会

日時 2008年3月16日(日) 13:30～  
会場 江戸川区「勤労福祉会館」和室第1・2  
〒134-00 江戸川区船堀 4-2-5(都営新宿線「船堀駅」下車徒歩3分) 03-3688-1481  
内容 ハイリハキッズのHP作りの検討  
ご家族の皆さんが欲しい情報、伝えたい情報の意見を聞かせて！  
問い合わせ先 千葉県千葉リハビリテーションセンター地域連携部 相談室 菅原  
043-291-1831(代)内線181

## 編集後記

おかげさまで、第4号が発行できました。今年も引き続き発行していきますのでよろしくお願ひします。さて、高次脳支援に携わる中で、ご本人やご家族に、「メモ」とか「記録」などをすすめられたこと・すすめたことありませんか？そこで私も記録づけにチャレンジで、日記を試みてみました。いやあ、これが大変です。元来、習慣がないこともありませんが、その日の出来事を、すぐに思い出せないこと多かったり、書く時に思い出せないことたりなど。さらには、同じような生活の繰返しであまり書くこともなく…とつい面倒になってきています。後から役立つと思って、今続けるには目的や動機づけが大切だと改めて痛感しています。果たして続くのでしょうか？すでに弱気な私が買った日記帳は10年間記録のもの：買ったと無謀なチャレンジかと反省中(M)

掲示板こ～じのうの発行から1年が経ちました。情報誌はみなさんのお役にたっているのでしょうか？編集長の「日記」までは行きませんが、若い頃は約束事をアタマで記憶していたことも、今はスケジュール帳をつけたらなくてはならなくなりました。最近、手帳に書いたことも忘れて約束をすっばかす始末…あー手帳を見る習慣をつけなければ…はて？真っ白な手帳を見つめて、その前に予定をいれなければ…とあせる私(Y)

こ～じのう掲示板ではご意見、ご感想、情報をお待ちしております！お送り頂いたものは掲示板に役立てていきたいと思っております。

宛先メールアドレス kouji@chiba-reha.jp